B3-2

意識障害患者の意思表出の向上を目的に上肢運動と認知機能を刺激した楽器活動について

○奥村 由香、金高 織江、東 和歌奈、石川 明奈、田原 香里
槇林 優、浅野 好孝、篠田 淳

木沢記念病院　中部療護センター

【目的】遷延性意識障害患者で重度の四肢麻痺を呈する症例に対して、意思表出の向上を目的とし、残存する左上肢運動と認知機能を刺激する音楽活動を施行したので報告する。

【症例】18 歳女性、右利き、脳挫傷、び慢性軸索損傷。自動車事故で受傷、JCS-300。受傷 3 ヶ月後当センターへ転院。転院時は最小意識状態。筋緊張の亢進と弛緩部位が混在してみられ、発語は不可、眼球と左中指に僅かに随意運動がみられたが指示動作は不可、運動障害は麻痺・指示理解低下・失行・筋力低下のいずれによるものか不明な状態であった。頭部 CT では左側頭葉、頭頂葉、後頭葉に挫傷痕を認めた。

【経過】転院時より PT、OT、ST、MT(音楽療法)を開始。受傷 5 ヶ月後、眼球運動による Yes/No が確立、麻痺のレベルは両下肢 BRSII、両上肢 BRSII、右手指 BRSI、左手指 BRSII で、口部顔面失行、発声失行が疑われた。7 ヶ月後、左手指 BRSII～III、9 カ月後、左手指 BRSIII～IV、左上肢は低緊張であるが僅かに随意性が出現した。言語・精神機能検査で失語症状はなく注意力低下を認めた。MT では、キーボード、ギター、打楽器類の操作方法と活動内容を分析し、左上肢の可動域拡大と筋力の向上、注意力の向上を目的に楽器活動を施行した。11 カ月後、左上肢運動で楽器の音出しが一部可能、机上活動では意思を示す文字カードを選択しリーチすることが可能となった。

【考察】運動と言語・精神機能を精査し、左上肢運動と注意力の向上が意思表出の一助になるという仮説をチームで共有した。これに基づいて実施した楽器活動は、症例の意思表出を支援したと考えられる。今後、文字盤等の導入を支援したい。